

グラバ・ドウェイン宰相はかつて先王と成した傾国の日の朝の雰囲気を感じ取った。

「……………」

根拠はない。ただ、そんな空気を肌で感じ取った。肌がピリピリと痛むのだ。

そういう日は決まって、良くも悪くも必ず何かが起こってきた。昔からそうだった。

王座奪還を成した日も、挙式した日も、先王が死んだ日も、必ず肌が妙に痛んだ。

痛みは大小様々だったが、特に痛んだのは王座奪還の朝だった。

そのときの痛みをグラバは思い出した。

「痛いな……」

理知的な男はこれまでに何度もその痛みに助けられてきたことを実感している。しかし、その痛みを成功の理由にするのを避け続けてきた。その痛みのせいにするのもおかげにするのも、真面目で理知的で頑固な男には耐え難いことだったからだ。

それでもその痛みを老人になるまで無視することが出来なかったのには、外的要因があった。親友だった先王に、小さい頃、「肌が妙な痛みを発すると何かが起こる」というようなことを話した。それ以来、親友はグラバの肌の傷みを気にし、また行動の根拠とするようになった。そして、それはすべからくの中した。親友はそれをグラバのおかげだと何度も言ったが、当人はついぞそれを固辞し続けた。死に際のそれすらも。

そんなことを思い出すも、頑固一徹な男は頭を振った。

痛みを感じながら寝台から下り、痛みを感じながら洗顔し、痛みを感じながら朝食の間を過ごし、痛みを感じながら報告書に目を通し、痛みを感じながら庭で茶を飲み、痛みを感じながら息を吐き、痛みを感じながら空を見上げた。

良い朝だ。青々とした、良い空だ。

そう思いながら、おだやかな気持ちの中、目を閉じた。肌の傷みは最高潮になっていた。眠気が意識を染め上げようとする最中、前兆なく、屋敷中から陶器が割れる音が外に響いた。

——— ああ………これか。

色彩豊かな花々が咲き乱れる庭園に五人の男達が立ち入ってきたことにより、おだやかな時間が終わった。

「そうか……おまえたちか」

悟ったような顔の宰相に、勇んで入ってきた五人の男はみな思わず気圧される。凄まれたわけでもないのにそうなったのは、宰相が自身の身に何が迫っているのか理解していることを理解したからだだった。

最前とその半歩後ろに立つふたりは、しかしてすぐに決意を取り戻し、最前の男がはっきりと言い放った。

「その首、頂戴する。この国の発展のためだ」

宰相は目を閉じた。死に顔が美しく在れる様に。